

つ
ば
め

四月中旬のある朝のことである。駅のなかの様子がいつもとちがう。せまい待合室の中央に、

背中合わせにおいてあった二脚の長椅子の位置が変わって、左右の壁寄りに一脚ずつ相對しておかれている。待合室のなかの様子が急に変わった感じがしたのも、そのためであった。

発車時刻までには十分も間があるせい、わたしのほかにはまだ来ない。長椅子に腰をおろすと、一羽のつばめが、にぎやかに鳴きながら、改札口をぐりぬけていった。見ると天井のまん中どころに、四角に切ったベニヤ板が針金でつるされている。さっきのつばめは、巢作りの泥をはこぶために、田んぼへまた引き返していったのであろう。その巢の下には、ま新しいふんが数滴落ち散っている。長椅子の置きかえは、乗客をふん害(?)から守るための駅員のはからいとわかった。

中西悟堂氏の「鳥の歳時記」によると、つばめは、巢を定めるのにきわめて慎重で、三日でも四日でもその家に出入りつして、さまざまの営巢条件を観察するという。清楚で如才のないエピソードの紳士も、愛児をはぐくむ場所を設けるためには、極度に注意ぶかいときくのもうれしい。そして、この遠来の客を迎える田舎駅の駅員のあたたかい心づかいも、何かほのぼのとしたものを感じさせるのである。

(昭和四十一年六月)